特　集

ことばをめぐる包摂と排除

台湾の言語をめぐる包摂と排除

吉田真悟
よしだ・しんご

1.　序言

台湾[1]には多様な言語が存在しており、その背景には様々な人々が交錯した複雑な歴史があるが、その「交錯」のあり方は長きに亘り、外から来た集団が元々居た集団を支配するという構図によって特徴付けられるものであった。台湾の民主化とは、歴史上繰り返されてきた支配／被支配の構図を転換（しようと）する出来事であったとも言える。本稿はそんな台湾の言語状況・政策を「包摂と排除」という観点から検討するものである。

日本における台湾への関心は近年高まりを見せている。35歳という若さでデジタル相に抜擢されたオードリー・タン（唐鳳）氏への注目もその一例だが、日本の言説で特徴的なのは、「日本の人々自身が『日本は遅れている』と痛切に感じている分野への取り組み」について、台湾から「日本にも活かせる学び」を得ようという傾向（栖来 2022）である。またタン氏がトランスジェンダーであることや、アジア初の同性婚合法化（2019年）に象徴されるように、台湾への注目においてしばしばキーワードとなるのが「多様性の包摂」である。

本稿では台湾の経験を検討することを通じて、言語に纏わる問題について日本がそこから何を学べるのか、またそれが多文化／多言語主義をめぐる議論一般に何を示唆しているのかについても考えてみたい。

2.　外来統治の時代―国語による近代化と母語の排除

17世紀以前の台湾は、今で言う原住民[2]が中心の社会であったと考えられている。台湾原住民が話す言語は、比較言語学による系統分類ではオーストロネシア（南島）語族[3]に属すとされるが、単一ではなく部族毎に異なる言語を有しており、当時はそうした原住民全体を束ねる組織や政権は存在しなかった。

17世紀に入ると、まず西洋からスペインとオランダが台湾に進出した。これ以降台湾には様々な人々がやって来ることになるが、その歴史に共通していたのは、外来の集団が先住の集団を支配するという構図である。オランダ統治時代にはプランテーションの労働力として集められたことをきっかけとして、大陸から漢族の流入も増加し始めた。そんな中で、清に滅ぼされた明朝の遺臣鄭成功一族がオランダを駆逐し、「反清復明」の拠点として台湾を統治するようになる（1661年）。しかしそれも長くは続かず、今度は鄭氏政権を制圧した清朝による統治が開始され（1683年）、この間に漢族は人口の上で原住民を凌駕し、台湾での多数派となるに至った。

漢族の中では対岸の福建省南部、即ち閩南（びんなん）地方からの移民が最も多く、その言語である閩南語が後に「台湾語」と呼ばれるものの原型である。福建省南部は初めに開けた泉州、次いで栄えた漳州という2つの港町を中心に発展したため、台湾の閩南語も主にこの2地点からもたらされた。また、広東省の梅県や海豊、陸豊等から来た客家（はっか）人によって話されていたのが、同じく漢語系（シナ・チベット語族シナ語派）の客家語である。後に台湾の「四大族群」（後述）と呼ばれるようになるエスニック・グループの内、閩南人、客家人、原住民の3つがこうして形成され、台湾はこの時点で既に多言語社会であったと言える。

しかし清朝時代の台湾では、「台湾人」や「台湾語」という用語はまだ一般的に使用されてはいなかった。多数派の閩南人であれば、実際には自らのことを「泉州人」や「漳州人」というように具体的な祖籍地か、「府城（台南）人」や「鹿港人」のように現住地を以て自認していたと考えられている。日本時代に入ってから日本人や日本語という「他者」と対峙して初めて、全島規模の「台湾人」というアイデンティティや、その最多数派の言語としての閩南語に対する「台湾語」という呼称が誕生したのである（王甫昌 2003: 24-30; 蕭阿勤